

小児慢性疾患（臓器系）に関する研究

評価委員 蒲 生 逸 夫

1. 小児腎疾患の臨床的研究（小林収班員）

学童、生徒の集団検尿によつて無自覚性の蛋白尿、血尿、あるいは両者を多く見出し、それらは多様な腎、尿路疾患の存在を示すものであることを明らかにし、また一部は早期発見、早期治療に成功している。しかしながら、なかには、そのまま放置して日常生活を続けてもとくに異常をきたさないものが少なくないことも否定できない。無自覚性蛋白尿の腎生検による診断あるいは治療経過の確認はもとより大切であるが、同時に腎生検以外の方法による病態の診断並びに家庭、学校、校医などとの密接な連関による経過予後の長期間観察を行うことをも期待する。

2. 小児心疾患の臨床的研究（大國真彦班員）

1) 小児心筋疾患の臨床的研究（大國真彦班員）

小児心筋症の実態をしらべ、その頻度はリウマチ性心障害と同様に約0.01%であることを明らかにした。これをもとにして、さらにその診断規準の設定、原因の追求へと進展することを期待する。

2) 先天性心疾患の長期管理基準の設定に関する研究（曲直部寿夫班員）

先天性心疾患の術後の生活指導管理は学校保健上からも大きな問題である。活動制限によつて、急死その他を防ぐと同時に誤つた制限によつて小児心身の順調な発育を妨げることがあつてはならない。Cal/minの最大負荷に基づく管理基準案が設定されたが、その適用結果を個々例についてよく検討・吟味することが望ましい。そのためには、家庭、学校、校医、主治医等相互の密接な連関を実現する組織も必要であらう。

3) 川崎病（MCLS）の心臓障害に関する研究（草川三治班員）

川崎病による心臓障害は、その頻度が大きいことから重要な問題である。冠動脈障害が副腎皮質ホルモン剤よりもアスピリンを用いる方がよいなど大きな成果が得られた。しかし、原因なお不明で経過予後の予測が困難な疾患であるから、さらに広く全国の研究者を集め、又新たに研究に参加するものをも受け入れて、研究がさらに進展することを期待する。

4) 動脈硬化症の一次的（小児期）予防に関する研究（熊谷通夫班員）

日本でも小児期の高脂血症が比較的多く見出されることが明らかにせられた。このことと動脈硬化症乃至高血圧との関係の検討がさらに進展することを期待する。

3. 難治性ぜんそくに関する研究（中山喜弘班員）

近年、小児気管支喘息の増加に伴つて、通常の治療では改善されず、しばしば副腎皮質ホルモン剤を用いなければ日常生活ができない重症例も増えている。これらの病態を各方面から検討した成績も貴重であるが、一定の治療の基準と、日常生活の管理、鍛錬療法の指針によつて得られた治療成績の意義は

大きい。そして今後さらにその結果を常に治療基準に反映させて改変する姿勢が大切であるとする。

4. 小児の難治性肝疾患の病因・早期診断・治療に関する研究（小林登班員）

新生児又は乳児早期の黄疸には早期治療を要する疾患によるものが多い。これらの鑑別は困難な場合が少なくないだけに、その診断基準を定めることは予後を左右するとも云える重要な問題である。診断基準の設定はこの分野の研究の出発点であると同時に、到達目標とも云えよう。

5. 先天性四肢障害に関する臨床的研究（馬場一雄班員）

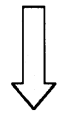
サリドマイド胎芽病の研究を発端として、先天性四肢障害の成因、実態、診断基準や鑑別診断に関する研究が一段と進められている。問題の性質上、もちろんなお十分の成果を得たとは云えないが、正確な診断及び分類の確立、そして成因、予後の予測、さらに遺伝相談に応用できるまでの進展を期待する。

- (1) サリドマイド胎芽症の症状との相違点として、他の先天性四肢障害では片側性又は左右差が大きいものが多く、合併症として各種の奇形がみられるという。これらの相違の原因の追求を望む。
- (2) 四肢障害の症状による分類がさらに発展して、先天性奇形発生の監視計画に利用できるようになることを期待する。
- (3) 遺伝性ムコ多糖体代謝異常の欠損酵素と臨床症状との関連性の追求は、その対策に直接に連るのであろう。
- (4) 小奇形や異常皮膚紋理を検索して早期胎内障害の有無やその障害の時期を推測するとの考えは、心身障害児の成因を想定する手がかりになるわけで、その成果を期待する。
- (5) 四肢障害の実態調査は極めて面倒なものと思われるが、判定の基準化を含めて、広く行われるべき事態に達していると云えよう。

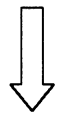
6. 筋拘縮の発生予防に関する研究（堀誠班員）

薬物筋注による直接障害を避けるために、注射薬物の細胞組織障害性の軽減化、並びに他の投与方法ことに注腸坐薬の研究が進められている。今後さらに筋注の適応又は必要性筋注と皮注の比較などへと、研究が進むことを期待する。

以上のように、小児慢性臓器疾患についてそれぞれの特徴ある研究が進められており、その成果にはみるべきものがある。今後さらに新たに研究に参加するものを迎え、一層の成果を得ることを期待する。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 小児腎疾患の臨床的研究(小林収班員)

学童,生徒の集団検尿によって無自覚性の蛋白尿,血尿,あるいは両者を多く見出し,それらは多様な腎,尿路疾患の存在を示すものであることを明らかにし,また一部は早期発見,早期治療に成功している。しかしながら,なかには,そのまま放置して日常生活を続けてもとくに異常をきたさないものが少なくないことも否定できない。無自覚性蛋白尿の腎生検による診断あるいは治療経過の確認はもとより大切であるが,同時に腎生検以外の方法による病態の診断並びに家庭,学校,校医などとの密接な連関による経過予後の長期間観察を行うことをも期待する。